

(添付資料 1)

最優秀賞
文部科学大臣奨励賞

「絆のレシピ」

宮城県仙台市立五橋中学校
二年 佐藤 怜美



「絆のレシピ」が、今、私の手元にある。

今年、私が所属している女子水泳部は、四百メートルメドレーリレーで、東北大会の標準タイムをきることができた。リレーは、四人でつなぐ。しかし、東北大会のタイムをきることができたのは、四人だけの力ではない。私たちを支えてくれた人たちの力があったからだと思う。

五月、放射能の影響で、例年通り泳ぐことはもちろん、水泳部員がプール掃除をすることもできなかった。部員の保護者や先生方の力を借りることとなった。昨年より十日程遅れて入ったプールは、とても輝いて見え、多くの励ましを感じることができた。

六月、いよいよ市中総体が始まった。リレーのタイムを、一秒でも縮めて東北大会に近づくというのが、私の目標だった。結果は、東北大会出場まであと四秒という微妙なものであった。一人一秒ずつ上げれば出せるタイムだ。しかし、それが容易ではないことを、四人それぞれが感じていた。県大会まであと一ヵ月となり、なんとしても自分のタイムを上げる、私はそう思っていた。

そして県大会を迎えた。「タイムが落ちてしまったらどうしよう」という緊張感でいっぱいになった。それが顔に出ていたのだろうか。メドレーリレーの予選前、部員や友人たちが次々と声をかけてきた。その時、私はある違いに気がついた。個人レースの時は、「怜美ちゃん、がんばって」と言われるが、リレーの時は、「五橋がんばれ」と団体として応援してくれていたのだ。

思えば、市中総体では、「遅かったらごめんね」「大丈夫、私の方こそごめん」と、互いに自信のない、前向きではない会話ばかりだった。リレーは、チーム力が試される。一人一人が速くても、相手を信頼し、絆で結ばれていなければ、一つにまとまったチームにはなれない。自分のことばかり思っていては、逆に力が入ってしまうのではないかと思った。

他のメンバーも私も、毎日毎日、一生懸命練習してきた。リレーの引き継ぎのタイミングがなかなかつかめず、何度もやり直した。そんな私たちだからこ

そ、互いに交わす言葉は、心にある不安や言い訳にも似た言葉ではなく、「今まで練習してきたから大丈夫」「私たちなら大丈夫」といった互いへの信頼が伝わる言葉であるべきなのだと気がついた。

「大丈夫。絶対に標準記録をきれるよ」

一緒に練習してきたからこそ、交わせる言葉だった。第一泳者が飛び込んだ時、不安な気持ちはなく、自信にも似た思いがあふれてきた。予選の結果は、市中総体よりも五秒速いタイムで泳ぐことができ、東北大会出場が決定した。

「やったあ」とみんなで抱き合った。部員のみんなも「おめでとう」と笑顔で言ってくれた。一緒に戦ってきた仲間が笑顔を見せてくれて、私は本当に嬉しくて、幸せだった。一つの目標に向かって努力してきたこの一カ月は、自分自身も、部全体も、大きく成長したと思う。やっと一つのチームになれたと思った瞬間だった。

「絆のレシピ」を見ると、材料の欄には、「思いやり」「友情」「感謝する心」「相手を思う一言」「笑顔」などが、分量は明記されずにあげられている。そして「絆」の作り方の欄には、「目の前にある壁を仲間と共に乗り越える」だけだ。この手順でやらなければならない、といった決まりは何一つない。

私は「絆のレシピ」を、世界中の人たちに手渡ししたい思いでいっぱいだ。日々努力して生まれた絆の強さを、そしてそこから生まれる優しさや強さを伝えたい。絆の強さは、努力した分だけ強くなる。今回、私たちの間にできた絆は、一カ月という短い間にできたものだ。この一カ月を努力し続けたからこそ、一つの壁を乗り越えることができ、強い絆を結ぶことができた。レシピには、「時間」は書かれていない。たった一つの行事で生まれる絆もあれば、長い年月をかけて生まれる絆もあるだろう。

「絆」を手にするまでの日々は、決して楽しいことばかりではない。弱音を吐いたり、不安になったり、逆に傷つけられることもあるかもしれない。しかし、そこであきらめてしまってはいけない。これが唯一の注意事項だ。一つの壁を乗り越えようと、強く思っほしい。どれも、その人にとっては大切な大切な「絆」になるのだから。

私はこれからも、目の前のことに全力で取り組み、自分の可能性を信じ、苦しんでも日々努力していきたいと思っている。「絆」は私を強くしてくれた。一人ではできないことを可能にしてくれた。

今、いろいろなことに苦しんでいる人たちの心の支えになるものは、「絆」であると信じている。